

★7月号の特集は『運動会をとらえなおしてみる』(19頁～)

- ◆「読者のみなさんに聞きました」では、①子どもの成長を共に喜びあえるうちの園の運動会、②運動会の意義・原点を話しあっていますか、③子どもに負担になっていない?、④運動会見直してよかったことなどたくさん報告されています。
- ◆大阪府・アトム共同保育園では、運動会は子どもにとって非日常の緊張体験だから、子どもの自己決定・自己表現の場として、4・5歳児を対象に「アトムフェスティバル」として開催しています。(27頁)
- ◆実践は、①3歳児から異年齢保育の京都市・旭ヶ丘保育園の子どもが主人公の運動会、②名古屋市・こすもす保育園はふだんのあそびを運動会の2本。(28頁～)
- ◆小論：藤野友紀(札幌学院大学)(39頁～) 園の保育文化のなかに子どものあこがれの種が蒔かれていて、そのあこがれの芽が子ども自身を励まし成長させる。運動会にはそういうすてきな面がある。その一方、運動会には保護者や関係者の前で「練習の成果を披露する」という側面も。あこがれのへの挑戦が、子ども自身の喜びであるかどうか——これが、運動会にむけての取り組みを見つめ直すときの一つの大きなポイント。子どもたちの声をどのように受けとめて返していくか。クラス担任だけで抱え込んで悩むのはもったいない。保育をよりいいものにしていく大切なチャンスなので、園の職員みんなで、その学びの機会を活かせたらいいですね。

★子どもの~~キモチ~~はどこにある? (58頁～) 池添 素さんの連載28。ゲームとのつきあい方その3

向きあうのはゲームではなく子ども。★「約束をしない」という提案。「これはあなたのゲームですから、あなたが責任をもって、自分で管理しなさい」「ゲームはやりすぎると視力が悪くなることや、朝起きられなくなるかもしれません」とリスクは伝えたくて、あくまでも自分で判断して行動を決めるスタンスを提案します。★そしてもう一つの提案は、ゲーム以外の楽しいことを、おとなはたくさん考えてほしいことです。★要求を押さえつけるほど、強い力でゲームに取り込まれていくと考えられるのではないのでしょうか。★ゲームを通して、まず子どもを信頼し、子どもからの発信をキャッチし、おとなからは楽しい活動を働きかけ、長い人生をゲームやSNS中毒で塗りつぶさなくてもよい大人のふるまいを提案してこのテーマを終えたいと思います。

★きょうも、ぽっかいスイートで(68頁～)平松 知子さんの連載112。私たちの問題として

前号に続き、沖縄のお話。私が一番胸に刺さったのは、平和に対する

